Ⅰ　研究指定校・指定地域の取組

○研究の概要（伊勢崎市立名和小学校の取組）

１　教育活動全体を通じて行う道徳教育

○日常における深い児童理解、温かい学級経営を行うなど、いじめの未然防止に努めるとともに、人権教育講師招聘学習会や講演等を行い、よりよく生きる児童の育成に努めた。
○全教育活動での道徳教育がその特質に応じて意図的、計画的に推進され、相互に関連を図れるように、道徳教育全体計画とその別葉、年間指導計画の見直しを行った。
○６年生主体による縦割り（異年齢集団による交流）活動や各種集会、あいさつ運動や委員会活動、学級での当番・係活動など、自己有用感や自己肯定感をはぐくむ体験活動などの充実を図った。

２　「思いや考えを伝え合い、互いに深め合う」道徳の時間の工夫・改善

○道徳教育推進教師が各学年の道徳の時間にＴＴとして支援できるようにするとともに、各学年の道徳授業日を同じ曜日に設定し、授業づくりや準備・振り返りを一緒にできるような学年内の協力体制を構築した。
○道徳の時間をより充実させるため、学年部会を組織の中心とし、授業づくり・授業研究会・授業改善をPDCAサイクルで定期的に行った。
○明確な指導観をもとに教材分析を行い、中心発問から授業構想を行うとともに、話合いをより活性化するために中心場面に補助発問を位置付けた。また、互いに考えを深めるための手立てとして、様々な表現活動の工夫を行うことで、道徳的価値について互いに深め合える授業実践の充実を図った。
○内容項目の４つの視点で色を変え、教材名を書いた「道徳の花」を授業後教室に掲示し、内容の視覚化・共有化を図ることで、道徳授業の確実な時数確保を組織的に行った。

３　家庭・地域との連携

○授業ごとに道徳家庭通信を発行するとともに、授業で使用する振り返りシートに保護者欄を設置することにより、学校と家庭が双方向で道徳教育に取り組んだ。
○学習参観や学校公開日における積極的な道徳授業公開を行うとともに、保護者参加型の授業を全クラス意図的に設定した。また、保護者や地域人材・ボランティアによる授業協力を効果的に活用することで、家庭・地域への道徳教育啓発に努めた。

４　研究の成果

○学習指導過程を検討し明確にすることで、全職員に「考えを深めるための工夫」の共有化を図ることができた。また、本校スタイルの学習指導案の検討、中心発問における「深めるための補助発問」を取り入れることにより、児童が道徳的価値を自分事として捉え、じっくり考え、思いや考えを互いに深め合うことができた。
○学習指導要領や年間指導計画、全体計画の別葉などに沿った明確な指導観に基づく略案を作成し、一人２授業の実践、全案を作成しての各学年３授業公開、その後の学年検討会に取り組み、積み重ねていくことで、授業づくりを核とした研究を進め、道徳の時間の工夫・改善につなげることができた。
○道徳教育全体計画の別葉を職員室に掲示し、視覚化を図るとともに、実践を基に加筆・修正を行うことで、他の教育活動との関連を図りながら補充・深化・統合を意識した道徳授業を構想することができた。

伊勢崎市立名和小学校の研究内容

１　学校の概要

学校名	所在地	電話番号	児童数
いせさきしりつなわしょうがっこう 伊勢崎市立名和小学校	伊勢崎市堀口町502-1	0270－32－0072	４７１人

２　研究課題

ともによりよく生きようとする児童の育成

－思いや考えを伝え合い、互いに深め合う道徳の時間の工夫・改善を通して－

３　研究課題の設定理由

道徳の時間を要として学校の教育活動全体を通じて行うという道徳教育の基本的な考え方を引き継ぎ、道徳教育の趣旨を踏まえた効果的な指導を学校の教育活動全体を通じて、より確実に展開することで、教育課程の改善を図っていきたいと考えた。

道徳科の目標に示されているように、よりよく生きるために道徳的価値に向き合い、いかに生きるかを自ら考え続ける姿勢こそ道徳教育で養う資質であり、道徳的な課題を一人一人の児童が自分自身の問題と捉え、「考え、議論する道徳」へと転換を図ることが大切である。

本校の児童は、困っている友達や下級生に優しく声をかけるなど思いやりの気持ちをもって接し、素直な児童が多い。花壇の花や教材園の野菜などの身近な自然を大切にしたり、身近な地域の人々と関わったりしながら明るく元気に生活をしている。しかし、よいと思っていても自分の考えに自信がもてず、積極的な行動につながらないところなど、理解した道徳的価値について日常生活に生かし切れない姿も見られる。また、他者の考えを尊重したり根拠をもって自ら考えたりすることはできてきているが、生活経験や学習経験と結び付けて自分事として考えるまでには至っていない。さらに、友達の考えを生かしたり取り入れたりして、これまでの自らの考えを深めることについても十分とはいえない。

以上のことから、本年度、副主題を「思いや考えを伝え合い、互いに深め合う道徳の時間の工夫・改善」とし、道徳の時間において、自分の思いや考えを伝え合い、他者の考えを自らの考えに取り入れたり生かしたりして、他者と関わりながら互いの考えを深め合う、多面的・多角的に考える話合い活動を取り入れることとした。そして、学習活動を工夫・改善することによって、「ともによりよく生きようとする児童の育成」を図っていきたいと考え、本主題を設定した。

４　研究の概要

(1)　研究のねらい

道徳の時間において、児童一人一人が、自らの思いや考えを伝え合い、他者の考えを自らの考えに取り入れたり生かしたりして互いに深め合うことにより、多面的・多角的に考え、他者と関わりながら自己の生き方を見つめ、「ともによりよく生きようとする児童」を育成する。

(2)　研究仮説

道徳の時間において、自分の思いや考えを伝え合い、他者の考えを自らの考えに取り入れたり生かしたりして、多面的・多角的に考える話合い活動を取り入れ、工夫・改善することによって、他者と関わりながらともによりよく生きようとする児童を育成することができるであろう。

(3)　研究の内容

①　研修主題「ともによりよく生きようとする児童」の明確化・共有化

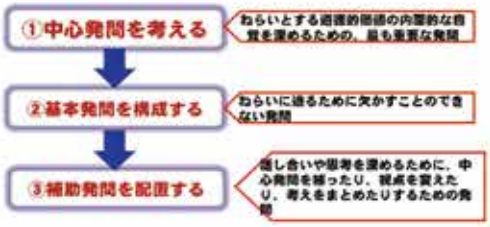
他者との関わりの中でよき人間関係を築きながら、他者の思いや考えを理解したり、自分の考えと比較したりすることで人間としての生き方についての考えを一層深め、他者とともにこれからの自分の生き方をさらに高めることができる児童と考えた。

②　思いや考えを伝え合い、互いに深め合うための道徳の時間の工夫・改善

ア　発問構成・発問の工夫

発問構成の際、教師が明確な指導観のもとに教材分析を行い、どのように道徳的価値の理解を図るのかを明らかにし、それとぶれないよう中心発問から検討していくこととした。また、児童が「自分の思いや考えを伝えたい」と思える発問、つまり、児童が自分との関わりで考えられる発問、必然性や切実感のある発問となるよう工夫・改善した。そして、中心発問で出された思いや考えを基に、価値理解・人間理解・他者理解が促され、互いに考えを深め合うことができるような視点となる発問を「深める補助発問」とし、中心発問における話合いの中に位置付けた。解決策の結果を考察させたり、可逆性を考えさせたり、普遍性を問うたりするなど、児童の心を揺さぶったり、深く考えさせたりする多様な発問を用意して授業展開を行うことで、児童が多面的・多角的に考え、互いに深め合うとともに、価値の理解も深めることができた。

【発問構成】



【深める補助発問の種類と具体例】

A　解決策の結果を考察する補助発問

「□するとどうなりますかそれはなぜですか。」

☆効果
・行為を行った結果まで踏み込んで考えることにより、自分事として考えた本音や現実論を出すことができる。

☆活用例
□に入る言葉
「難しくできなかったら」
「正直に言えたら」

B　可逆性を考える補助発問

「自分がそうされたらどうですか。それはなぜですか。」

☆効果
・他者の立場に自分を置き換え、その解決策が自分に適用されてもよいかを尋ねることで、より広い視野で多面的・多角的に物事を考えることができる。

☆活用例
・相手の立場や思いを考えさせたいときに有効である。

C　友達の考えに目を向ける補助発問

「出された考えの中で、なるほどなと思うのはどれですか。」

☆効果
・自分と異なる友達の考えについてより深く考えることができる。

☆活用例
・自分では気付かなかったことや、自分の考えが深まったり広がったりしたことの視点で考えさせる。

D　共通している気持ちを考える補助発問

「これらの考えに共通しているのはどんな気持ちですか。」

☆効果
・価値について焦点化できる。

☆学習活動例
・同じような考えが出されたときや、異なる考えの中にも価値に関わる共通点があるときに使うことができる。

E　一つを取り上げて考える補助発問

「この考えについてどう思いますか。」

☆効果
・教師が意図的に一つの考えを取り上げることで児童は価値についてより深く考えることができる。

☆活用例
・「この考え」の部分には、より深く価値に迫れるものを選ぶ。
・少数の考えを取り上げて考えさせることもできる。

F　普遍性を考える補助発問

「いつでも、どこでも、誰に対してもそうできますか。」

☆効果
・広い視野で様々な可能性を想定し、普遍妥当な解決策を考えることができる。

☆学習活動例
・人間理解を視点にした価値理解を捉えさせたい場合、有効である。

イ　体験的な活動・表現方法の工夫

○　役割演技・動作化

役割演技・動作化を取り入れることにより、児童は登場人物の感じ方や考え方などを自分との関わりで考えることができるようになった。特に、即興的演技である役割演技は、児童の今までの経験に裏付けされたものとなる場合が多く、このような体験を積むことで、児童が様々な問題場面に出会ったときに望ましい行為を主体的に選択できるようになると考えられる。いずれにしても、指導者の明確な指導観のもと、どの場面でどのように取り入れればよいかいうことを考え、実践してきた。

役割演技

動作化

○　思いや考えの視覚化

ねらいとする道徳的価値について、心情スケールや表情カード、ハートメーターなどを活用し、自分の思いや考えを可視化することにより、それらの根拠が明確になり、他者理解も促され、自分の考えを深めることにつながった。

心情スケール

表情カード

○　書く活動・話合い活動の活用

書く活動は、児童の学習の個別化を図ることができ、授業者の発問を児童一人一

人が確実に受け止め、自らの考えを明確にしたり、整理したりする機会として重要な役割をもつ。しかし、書く活動だけでは、道徳的価値の自覚を深めるには十分とは言えない。そこで、書く活動に加えて、自分の思いや考えを発表したり、友達の感じ方や考え方と比較したりする話合い活動を取り入れることが、道徳的価値の自覚を深めるためにさらに有効であり、児童相互の考えを深める中心的な学習活動と捉えた。その形態については、教師のコーディネートによる児童相互の交流をはじめ、児童同士によるペアでの対話、グループでの話合いなど多様に考えられる。本校では、ねらいとする道徳的価値の自覚を深めるための教師の明確な指導観をいつも念頭に置き、話合いの場や形態を考えてくこととした。授業後、児童の成長の記録としてワークシートや振り返りシートを道徳ファイルに蓄積し、ポートフォリオ評価として生かしている。

児童同士による対話

○　板書の工夫

黒板全体をシアター風にして、ペープサートや場面絵などを用いながら板書を構成していく「黒板シアター」は、児童の教材に対する興味・関心を高めるとともに、教材理解を促すことができる児童が自分事として考え、思いや考えを深めていくのに低学年では特に有効であった。また、類型化したり、対比的・構造的に示したり、中心発問における児童の思いや考えを吹き出し黒板などを使って大きく浮き立たせたりするなど、様々な方法があるが、どれも教師が明確な意図をもって行うようにした。このように板書を工夫することで児童は他者理解を深めるとともに、自分の思いや考えを深めることができた。

黒板シアター

吹き出し黒板による類型化

ウ　児童の心を引き込む教材提示の工夫

場面の状況や登場人物への共感を通して、児童の心を引き込む教材提示の仕方を考えた。BGMを流しながらの読み聞かせや紙芝居、スクリーン、ペープサートの活用など、授業者の意図による多様な教材提示により、児童が自分との関わりで道徳的価値について考えられるよう工夫した。

スクリーンによる教材提示

③　全教育活動における道徳教育の推進・充実

ア　道徳教育全体計画、年間指導計画、別葉の見直しと活用

重点内容項目については、新学習指導要領「特別の教科　道徳編」や学校教育目標、児童の実態等を考慮し、Ａ・Ｂ・Ｃ・Ｄの４つの視点から１つずつ設定し、それらに基づく目指す児童像を入れた道徳教育全体計画の見直しを行った。次に、「わたしたちの道徳」「小学校道徳読み物資料集」（文部科学省）・「道徳郷土資料集『ぐんまの道徳小学校』」（群馬県教育委員会）、複数の出版社の副読本など、児童の実態に合わせて教材を幅広く選び、年間指導計画を作成した。特に、重点項目を網掛けで強調することで、全職員の意識化・共有化を図ることができた。さらに、道徳教育は、学校行事や他教科との関連を図っていく必要性があると考え、別葉を職員室に掲示・視覚化を図り、学期毎に加筆・修正した。このことにより、職員が「補充・深化・統合」を意識し、教育活動全体を通じての道徳教育という認識ができ、実践につなげることができた。

別葉の見直し

イ　特別活動における体験活動等の充実

○　いじめの未然防止としての児童会活動

５・６年生の代表委員と生活委員が中心となり、いじめの未然防止活動の一貫として「あいさつ運動」に取り組んできた。「あいさつで　心つながる　名和小の“わ”」をスローガンとし、あいさつに焦点を当て、明るく元気でいじめのない学校にしようという児童の願いが盛り込まれている。また児童集会では、いじめ未然防止に主体的に関わる意識を醸成するため「名和小いじめ防止隊」の劇を行った。児童が自ら発案して台本を作り、児童目線の劇をすることにより、いじめをなくすことの大切さはもちろん、いじめを許さない、見過ごさないことがよりよい人間関係づくりにつながるということを伝えることができた。集会後、いじめ防止隊隊員証を希望者に発行することで、児童一人一人に、いじめの未然防止のための意識の高揚を図ることができた。

劇「名和小いじめ防止隊」

名和小いじめ防止隊 隊員証

○　自己有用感をはぐくむ縦割り活動・異学年交流

６年生を中心とし、全校児童が一緒に遊び、関わり合う縦割り活動を実施している。他にも６年生から５年生へマーチング指導を行ったり、４年生から３年生へ総合学習の発表会を行ったりするなど、上級生としての自覚や責任をもち下級生をリードする場でもあり、異学年の児童が自己有用感をはぐくむことのできるよい機会となっている。

６年生→５年生へ

４年生→３年生へ

ウ　環境整備

○　「わたしたちの道徳」を活用した掲示

「わたしたちの道徳」は、道徳の時間だけでなく、身近な所に置いて学級活動などの時間に事前指導として読んだり、書いたりしている。さらに、事後指導として、学んだことを教室や廊下に大きく掲示し、常時誰でも見ることができるようにすることで、児童の意識の高揚を図ってきた。

○　道徳コーナーの設置

各学年における道徳の時間の実践を校長室前に掲示し、児童や保護者等が興味・関心をもって見ることができる場となるよう工夫した。道徳教育の視覚化により、児童は自分たちの授業の様子を振り返ったり、他学年の実践の取組を理解したりすることができた。また、職員室内に「職員のための道徳コーナー」（教材・参考文献等）を設置することにより、職員が道徳教育や道徳の時間について、いつでも気軽に学べる場・話し合える場となった。

各学年の道徳コーナー

④　家庭・地域への啓発・連携

ア　授業公開ならびに授業参加

道徳教育を推進していく上で家庭への啓発や連携を図り、協働体制で進めていくことは、大変重要である考え、学習参観では全クラス、学年ごとに同じ内容項目で道徳の授業を公開した。その際、参観している保護者にインタビューに答えてもらったり、役割演技やゲストティーチャーとして授業に参加してもらったりした。

保護者と
役割演技

イ　道徳家庭通信の発行・振り返りシート

毎時間、道徳の授業後に「授業のねらい」「お話のあらすじ」「子

どもの様子と学校での指導」「家庭で話し合ってほしいこと」を『道徳家庭通信』で知らせている。また授業後、振り返りシートを持ち帰って保護者に見ていただき、一緒に考えることを通して、家庭でも道徳の授業について話し合い、家庭と学校の連携を深めてきた。

振り返りシート

5　実践研究事例

「明確な指導観」をもち、価値理解を意図した道徳の授業（第２学年）

(1)　主題名　　「よいと思うことはすすんで」（Ａ　善悪の判断、自律、自由と責任）

教材名　　「ぼく、よびにいってくる」　（出典；文溪堂　２年生のどうとく）

(2)　明確な指導観

①　価値観

「善悪の判断」つまり、人として行ってよいこと、社会通念として行ってはならないことをしっかり判断する力は、児童が幼い時期から徹底して身に付けていくべきものである。また、判断したことを行動に移すためには、よいと思ったり正しいと判断したりできる自信や自律的な態度を身に付け、自らを信じて何事にも積極的に取り組めるようにしなければならない。この時期の児童が、このような善悪の判断力と行動力を身に付けることは大変意義深いことと考える。そこでよいことについて友達に左右されることなく、自律的に判断し、よいと思うことを進んで行おうとする実践への動機付けを図っていきたい。

②　児童観

生活科の「どきどきわくわくまちたんけん」の単元では、相手や場に応じた適切かつ安全な行動について考えながら活動計画を立て、自分で判断し、行動する体験をしている。学級活動の「学習態度を見直そう」では、望ましい学習態度について考え、正しい行動ができるようにしていこうとする意欲を育てている。このように様々な活動を通して、児童は、善悪の判断とそれを進んで行うことについて考えてきたが、児童の思考は断片的で、よいと思うことを進んで行うことの大切さについてじっくり考える経験が少なかった。そこで本時では、「統合」を意図し、よいことを進んで行うことの大切さや難しさを自分との関わりで考えさせ、善悪の判断をし、よいと思うことを進んで行おうとする態度を養いたい。

③　教材観

ぽんすけが、ぽんきちににらまれても、「ぼく、よびにいってくる。」と言って駆け出すことによって、他のたぬきも自分のしたことに気付き、追いかけるという、善悪の判断をし、よいと思うことを進んで行おうとする姿が描かれている。そこで、この部分を中心発問とし、ぽんすけに共感させることを通して、自分との関わりで考えさせ、どんな状況においても、よいことと悪いことを正しく区別し、よいと判断したことは自分から進んで行うことが大切であるという価値理解を深めさせたい。ぽんすけの行動を通して正しい判断に基づいて進んで行動することのよさや大切さに気付かせることのできる教材であると考える。

④　展開の大要　□中心発問　☆補助発問

過程	学習活動・主な発問と予想される児童の反応	指導上の留意点
課題をつかむ 3分	１．様々な場面の絵を提示し、自分ならこんな時どうするか、発表する。 ・悪口を言うのはよくないことだから、「やめよう。」と言う。	・補助黒板を使い、様々な場面絵を提示しながら自由な雰囲気で発言させ、ねらいとする価値への方向付けを図る。
	２．教材「ぼく、よびにいってくる」の紙芝居を見て、話し合う。 (1)「かくれるんだ。」と言われて石に化けたとき	・紙芝居で資料提示することで､児童の内容理解を助ける。 ・しっぽを出したぽんすけの切

価値を追求する 27分	のぽんすけの気持ちを考える。 ・気付いてくれるといいな。 【価値理解】【人間理解】【他者理解】 (2)「ねえ、ぽんたもなかまに入れようよ。」と言ったときのぽんすけの気持ちを考える。 ・ぼくも仲間外れにされちゃうといやだな。 【価値理解】【人間理解】【他者理解】 (3)ぽんすけは、どんなことを考えて「ぼく、よびにいってくる。」と言って走り出したのでしょう。 ・ぽんたがかわいそうだよ。 ・ぽんた、ごめんね。やっぱり、仲間はずれはよくなかったよ。 ・みんなで一緒に遊ぼう。サッカー以外の他の遊びをすればいいんだよ。 【価値理解】【他者理解】 ☆みんなは、どんな気持ちでぽんすけの後を追いかけたのでしょう。 ・やっぱり、みんなで一緒の方が楽しいな。 ☆よいことをするって、どういうことかな。 ・少しの勇気で、みんながうれしくなる。	り抜き絵を提示しながら、悪いことと分かっていても隠れてしまったぽんすけの気持ちを自分との関わりで考えさせる。 ・「ぽんたもなかまに入れようよ。」と言うことはよいことなのに、なかなか言えないぽんすけの気持ちに共感させる。 ・ぽんたを呼びに行こうとするぽんすけの気持ちを、教師と児童との役割演技を通して、自分との関わりで考えさせる。 ・行動した後の気持ちよさや清々しさを周りの人も願っており、みんなも自分の行動を後悔し、よいことをしたいと考えていることに表情カードを活用して気付かせる。
価値の内面化 15分	3．これまでの自分を振り返る。 「みんなは、正しい行動ができているかな。」 ・自分が楽しいと周りの友達のことを考えなかったので、よく考えて仲良くしたい。 【価値理解】【自己理解】 4．普段接している同学年の先生から話を聞く。	・書くことで児童一人一人の価値の内面化を図り、実践意欲につなげていく。

(3)授業記録（T：教師　C：児童）

T：ぽんすけは、どんなことを考えて「ぼく、よびにいってくる。」と言って走り出したのでしょう。（中心発問）

＊ぽんすけをにらむ「ぽんきち」を教師、ぽんたを呼びに行こうと決心した「ぽんすけ」を児童が演じる役割演技を通して、ぽんすけの思いを深く考えさせた。

T：先生は「ぽんきち」、みんなは「ぽんすけ」になって、役割演技を通してぽんすけの気持ちを深く考えていきたいと思います。

でも、３対３じゃあサッカーできないよ。

ぽんたも一緒に遊びたかったと思うなあ。

じゃあ、違う遊びでもいいと思うよ。鬼ごっことか・・。

鬼ごっこならできそうかな。でも、ぽんたがいなくてもいいんじゃない？

それはだめだよ。みんなと一緒に遊びたいよ。そうしよう。

T：（演技の中断と話合い）はい、そこまでにします。見ていたみなさんは、どう思いましたか。

C１：やっぱり、一人になるのは寂しいし、かわいそうだから、みんなで遊べる遊びをや

るのは、いい考えだと思います。それなら、みんなが一緒に楽しくできるし。
Ｃ２：仲間外れをすると、自分も嫌だし、相手も嫌で、遊んでいても楽しくないと思うな。

(4)　考察

①　教師の明確な指導観（価値理解）に基づいた発問構想

○　ぽんたを呼びに行くかどうか葛藤が生じる場ではなく、「ぼく、よびにいってくる。」と、ぽんすけが決心した場を中心発問とし、役割演技を設定した。そうすることで正しいことを進んで行うことのよさ（価値理解）を考えさせたいという、教師の明確な指導観に基づく発問構想であった。

○　役割演技では、ぽんきちを教師、ぽんすけを児童が演じることで、考える視点をぽんすけに当てて、多様な思いを引き出せるようにした。

②　授業者の意図を表した板書の工夫

○　場面絵をペープサート風にして掲示したり、葛藤場面を２色のハートで表したり、吹き出し黒板（赤）を使って中心場面を浮き立たせたりすることにより、ぽんたの思いを視覚化することにより、ねらいとする道徳的価値に関わる多様な感じ方や考え方があるという他者理解が促された。

○　板書の効果的な活用により、よいことを行動に移すことの難しさや大切さ、よさなどの人間理解や価値理解を図ることができた。

板　書

６　研究の成果及び課題

(1)　研究の成果

・　学習指導過程を検討し明確にすることで、全職員に「思いや考えを伝え合い、互いに深め合うための工夫」の共有化を図ることができた。また、本校スタイルの学習指導案の検討、中心発問における「深めるための補助発問」を取り入れることにより、児童が道徳的価値を自分事として捉え、じっくり考え、思いや考えを互いに深め合うことができた。

・　全職員が、学習指導要領や年間指導計画、全体計画の別葉などに沿った明確な指導観に基づく略案を作成しての一人２授業の実践、全案を作成しての各学年３授業公開、その後の学年検討会（必要に応じて関係学年会）に取り組み、積み重ねていくことで、授業づくりを核とした研究を進めることができ、道徳の時間の工夫・改善につながった。

・　道徳教育全体計画の別葉を職員室に掲示し、職員の意識化・共有化を図るとともに、実践後、加筆・修正することで全教育活動を通じた道徳教育を推進することができた。さらに、「補充・深化・統合」を意識した、道徳の授業を構想することができた。

・　保護者・地域対象の道徳授業公開、保護者参加型の授業実践、道徳家庭通信の発行や振り返りシートの保護者欄の設置などを通して、学校と家庭・地域とが連携した協働体制で道徳教育を推進することができた。

(2)　今後の課題

・　児童の多様な思いや考えを引き出し、それらをうまくコーディネートするだけでなく、児童が道徳的価値について主体的に考え、互いに交流できる場を意図的に設定することで「考え、議論する道徳授業」を展開し、道徳的価値の自覚及び自己の生き方についての考えを深めていけるような質の高い授業実践に努めていく必要がある。

７　参照できるホームページ

http://www.isesaki-school.ed.jp/nawasyo/　（伊勢崎市立名和小学校）